



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道方言のアクセント特徴に関する記述的研究〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	DALLYN, THOMAS DANIEL
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12956号
Issue Date	2018-03-22
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/70210
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Thomas_Daniel_Dallyn_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学） 氏名： ダリン トーマス ダニエル

主査 准教授 李 連 珠
審査委員 副査 教 授 佐藤 知己
副査 教 授 藤田 健

学位論文題名 北海道方言のアクセント特徴に関する記述的研究

・当該研究領域における本論文の研究成果

本研究は、北海道方言アクセントについて申請者自ら北海道各地において方言調査を行い、そこから得たデータに基づき、その共時的特性や共通語化に至るプロセスから通時的変化の方向性まで明らかにすることを目的として網羅的に記述したものである。従来、北海道方言のアクセントに関する研究は、方言意識調査や語彙レベルでとどまっているものが多く、北海道全域に及ぶ記述的研究ができたこと自体に先ず大きな意義がある。

名詞、動詞、形容詞におけるアクセント体系及びアクセント規則を明らかにしたこと以外にも特に次の2点を明らかにしたことを本論文の研究成果として評価できる。

先ず、句頭における非上昇調の実現とその音声的制約を明らかにできたことである。従来、共通日本語アクセントにおいて、ピッチの下がり目（下降調）がアクセント型の対立を持たせる弁別的特徴であるのに対して、ピッチの上がり目（上昇調）は、そこから句が始まるという句の境界を示し、文の意味に関わる役割を担うものとして注目されてきた。句頭において上昇調が現れない（本論文でいう非上昇調）場合はあるものの、いずれも分節音的制約（語頭の2モーラで1音節を成す場合）で説明できる場合のみである。一方、北海道方言においては、共通語と同類の分節音的制約によるものとは見做せない非上昇調の現れがあり、本研究ではそれが無声阻害音で始まる語で且つ無核語の場合に現れやすいという音声的特徴を浮き彫りにできた。続けて、音響学的分析と定量分析の手法を用いて、この考察が妥当であることを裏付けるような結果が得られ、さらに第2モーラ目の子音の性質や語頭モーラの母音の広狭の性質も順に関連することを明らかにするなど、従来共通語において上昇調の現れる制約に加えて、他に音声的要素の制約が関わることを明らかにした。このことは、分節音のある性質がピッチに関わる制約として働くということを明らかにし、一般音声学的にも貢献できた点であるといえる。

次に、北海道における4つの方言地域（道央、道北、道東、道南）と話者の世代差において、語類とアクセント型の対応関係から4つのパターンを導き出し、それらの分布を可視化することにより、アクセント変化の観点から北海道方言における共通語化のプロセスを浮き彫りにすることができた点も本論文の特記すべき成果の一つである。この仮説に対しても、定量分析（ロジスティック回帰といった統計的手法）に基づいた分析を行い、共通語化により大きな影響を及ぼしている要因を導き出すことができた。言語外的要因としては、話者の年齢と地域の順で有意義であり、ジェンダーは有意義でないことを明らかにした。言語内的要因としては、Ⅳ類・Ⅴ類の広い母音を含む語彙における変化のプロセス（②型⇒①型）に比べて、Ⅱ類の語彙における変化（⑩型⇒②型）が、より共通語化プロセスに関わっていることを明らかにすることができた。

以上のように、調音音声学的記述のみではなく、音声分析ソフトを用いた音響分析や統計的分析の手法を取り入れることによって、考察内容や仮説に対して客観的裏付けができたことは申請者であったからこそ可能であったことであり、高く評価できる点である。

・学位授与に関する委員会の所見

審査では、共時的記述研究から、アクセント変化という通時的現象への解釈をするのに少し無理があるのではないかという指摘がなされたものの、同一地域における世代差から言語の変化の側面を捉えようとした試みは評価できるという意見も出た。また、何よりも英語を母語とする者として、長い間北海道のさまざまな地域へと出向き、多数の方言話者と直接向かい合いながら、言語調査ができたことそれ自体に対しても高く評価したいということに審査員の意見が一致した。なお、助詞などを含む日本語の細かい瑕疵が多々現れていることが審査で指摘されたが、ただちに修正可能なものばかりで、本論文の評価を大きく下げるものではない。また、申請者は、既に関連する専門の学会にて10件の研究発表を行っており、その成果を論文4編にまとめて公開している。

以上の審査結果から、本審査委員会は全員一致で本学位申請論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものであるとの結論に達した。